

DOJIN  
R18  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁

チキバナズ

体験版

シナリオ: 順三郎  
イラスト: めんだこ

体験版本文54p / イラスト3枚 / 差分28枚

自称最強

サキユノビス

ちゃん!

カツプ焼きそばから  
召喚されたのは...  
純血のサキユバスだった!?

自称最強

サキユバス

ちゃん!


何も知らない無垢な悪魔に  
えっちなことを色々教えてあげよう。

純真なサキユバスちゃんは、  
どんな淫魔に成長するんだろう？

自称最強

サキユバス

ちゃん!



「ただいま……」  
アルバイトから帰宅した俺は  
いつものように冷蔵庫を  
開けたが、中は空っぽだった。

やむを得ん。  
決戦兵器を出そう。



俺のイチオシのインスタント。

『ザ・カップ焼きそば』

濃い濃いイカスミあんかけ麺だ。

熱湯5分！

そこらの安物とは違うね。

「ふふふ、これで仕上げだ！」

真っ白な麵にどす黒い  
イカスミソースを袋から注ぐ。  
みるみるカップの中は  
黒く染め上げられていく。

「漆黒に〜染まる〜俺の晩飯〜♪」

意味もなく鼻歌も  
出てくるってもんよ。



すると突然、カップ焼きそばから  
激しい黒煙が舞い起こる！

—夜の帳が全てを

漆黒に染め上げる

漆黒こそ美

漆黒こそ永遠—

もくもく

もくもく

「我は高貴なる  
純血のサキユバス  
我が名はアンジュラ  
ここに召喚せり！」

アンジュラ!



ででーん！

目の前に突然、赤毛の美女が現れた！  
腰のあたりからコウモリのような  
羽をひらひらさせている。  
膝下からはスケスケの網タイツ。



たわなおっぱいを隠せているのか  
どうかも怪しい、ボンテージビキニ姿だ。  
なんか頭から黒い角が2本生えている。

「な、何だお前…」

「……………」

俺たちは無言で  
互いを見つめ合った。



コホン

目の前のピキニ娘は  
かわいく咳払いする。

「ほら、なにか言うことはないの?」

「ん? なにかって」

「目の前にこくんなかわいい

サキュバスが居るっていうのだ!」



「お前、サキュバスなのか？」

「ええ、そうよ」

「なんで？」

「なんでって、召喚されたからに  
決まってるじゃない」

イカスミソースで召喚される  
サキュバスなんて初めて見たわ！  
いや、サキュバス自体初めてだけど！  
ちなみに俺のイカスミカップ麺は  
ハイヒールに踏み潰されていた。  
お、俺の晩飯が…。



「ふむ…召喚された…」

「そうよ、高貴な魔族だけが  
使える高等魔術。

主従関係を結べる相性ぴったりの  
相手が居るところに召喚されるのよ。  
そこらの下等なコウモリちゃんには  
無理な相談だわ」

アンジュエラと名乗った  
ボンテージ姉ちゃんは  
どこか得意げだった。

「なるほど…。まあ、話はわかった」

「そう、話が早くて助かるわ」







「晩…ご飯？ 何が？ どこに？」

「お前が今踏み潰しているやつ！」

アンジェラは足元を見る。

そこには干からびて粉々になった

カップ焼きそばの残骸だけがあった。

「あなた、こんな粗末なものを食べていたの？」

「粗末っていうなっつっつ！！」

奮発したんだぞっつっつ！！」

自炊の材料を切らして、取っておいた

無けなしのカップ麺を引っ張り

出してきたのはこの際内緒だ。

「ご飯食べたいの？ 出してあげるわ」

ミヤミーニ！

アンジュエラが短い呪文を唱えようと、  
胸元からいくつかの物体が  
ポトポトとテーブルの上に転がり落ちた。  
パン、焼いた肉、革袋に入った何か。  
試しに袋を開けてみると、芳醇な酒の匂いが。  
コップに注いでみたらワインだった。  
今日び、革袋に入れた酒なんて見かけねえな。





(あ……。ヤバ、魔力が……)  
召喚を含む異世界転移は大魔法だ。  
アンジェラは自分の魔力が枯渇する  
予感に焦り始めていた。  
「すまん、腹減ってるから  
食わせてもらおうぞ」  
「え、ええ」

バクバクバク!

俺はテーブルの飯を  
ものの5分で平らげた。  
学生の食欲なめんな。





「ごちそうさま」

「どういたしまして。」

「それで本題なんだけど」

「本題って？」

「魔族が召喚されたのよ。」

「主従の契約を結ぶに

決まってるじゃない」

「そうなのか？」



「我は、召喚されたばかりで

喉がカラカラなの。

精をちようだい」

「ふーん。ちなみに

契約しなかったら？」

「召喚魔法の効果が切れたら、

我は元の世界に戻るわね」

「それ、お前が困るんじゃないの？」

ギクリ!

目の前の美女は露骨に焦りだした。

「わ、我は、高貴なる純血の

サキユバスですし?

召喚魔法なんて簡単な

魔法で失敗するなどと——」

「——いうわけにはいかないわけか」

「そ、そうね……」

「さっきの飯の魔法のせいで

余計に魔力がない、と」

「ええ、そうよ。恩に感じて、

忠実なる下僕ちゃんに

なっけてくれていいのよ!」



「そうか、ならば条件がある」  
「そうなの。言ってみて？」  
「俺に絶対服従の使い魔になれ。  
ちなみにこの『世界のお約束』だぞ」

この世界のお約束ってなんだ。  
口からでまかせに決まってるだろ。

『世界のお約束』…。  
くっ、こんなかわいい  
サキユバスちゃんに、  
いけないことするつもりでしょ！』



「お前…消えるのか…？(魔力切れで)」  
俺はいかにも残念そうに  
つぶやいてみせた。

「わ、わかったわ。受諾する」  
余裕のないアンジエラは渋々受け入れた。

——我アンジエラ、

汝、ツトムツトムの絶対服後の  
使い魔になる契約を  
受諾する



その歌うような契約の呪文を耳にして  
俺の胸の中に温かいものが  
よぎったような気がした。  
これが契約ってやつか？






「もう我慢できないう。えら」

ビューン!

突如、俺はベッドの上にぶん投げられた。  
この女、見た目に合わず  
めっちゃくちゃ怪力だ!





「ご主人様、お腹ぺこぺこなの。  
哀れな使い魔ちゃんに精をくださいいな♡」  
そんな蠱惑的なセリフをささやきつつ、  
俺の腕をガツシリとつかんだ。  
身動きしてもびくともしねえ！

「人間はどこから精が出てくるのかしら。」

口から？ 鼻から？ 耳かしら？」

アンジエラ、いい匂いだな…。

机を挟んで向かい合ってた

ときにはわからなかった、

どこか果物のようなんとも

言えずいい匂いがする。

そしておっぱい、おっぱいである。

俺の手に余るほどの巨乳が

俺の身体の上に乗っかって、

ふにゅんとだ。ふにゅんとしてる！



更には柔らかかくてすべすべの  
太ももがチンコこすってる！  
やべえ、勃起してきた…。

「ねえ〜、精出して♡ ほらほら〜♡」

ぐにぐにっ

知ってか知らずか、アンジェラは  
俺のチンコを太ももでぐりぐりしてきた。  
あー、もう完全に勃ちちまったわ。



「??? 何か、固いものが

当たってるような…」

「俺の、おちんちんです…」

「おちんちん? おちんちんってなに?」

「俺がもっと気持ちよくなると、

精子が出ます。いっぱい」

さっきから俺は何を言わされてるんだ。



「精が出るのね！」

おちんちん欲しい！ 見せて！」

「あ、はい」

なんか流れでパンツまで脱いでしまった。  
俺のチンコはギンギンだった。



「すすすい。ビクビクってしてる…」

……

つん… ビクッ!



指先で触れると反動で木の枝がしなるように反り返ったチンコを見て、アンジェラはびっくりしていた。

ビクッ!



「これをもっと気持ちよくすればいいのね？  
こ、ことうかな…」

すりすり…。

「う、うお…」

おそろおそろ指先でこすり始める。  
あ、細くてしつとりしてる。  
手慣れた自分の右手とは違う、女の子の手だ。

んん

おははは…♡

んん

んんんん♡

んん



「ツトム、気持ちいい？ 気持ちいい？」

すりすり。

アンジェラは俺の反応を見つめながら  
強く弱くこすりたてる。

はあっ♡  
はあっ♡

「いっ…」

手でいじくられる快感を  
与えられながらの問いかけに、  
うめくように返すのが精一杯だった。

「ふふ、ツトム、気持ちいいんだ♡」

すりすり。すりすり。  
ああ、もう耐えられん。

おっ♡

おっ♡

ム

ビクッ  
ビクッ





「きゃっ！？」

アンジェラの顔といい手といい  
おっぱいといい、体中に精子がかかって  
べとべとになってしまった。

知味...

ドロドロ...

「何これ。ドロドロじゃない...。  
魔力みたいに煙じゃないんだ。ぺろっ」

びくっ

びくっ  
びくっ

ん

アンジェラは手についた精子を舐め取った。  
そのままコクンと飲み込む。

「喉に張り付く変な味。でもなんかクセになる」

ゴクン♡♡♡

ぺろっ♡

トロ...

ム

びゅん

トロ...

ぺろっ♡

ぺろぺろ。  
アンジェラは  
顔や胸に溜まった精子を  
丁寧にぬぐって  
全部舐め取ってしまった。



「っちそうまでした♡  
まだまだ足りないわ。もっとちようだい♡」

アンジェラは甘えるように  
俺にしがみついていた。

髪の毛からさっきかいだ  
いい匂いがまた漂ってきた。

ゴクリ。  
よーし、ここまで来たら、  
とことんやってやるうじやないの。

ギンギンツル

ぷるんっ♡

ははー♡  
ははー♡

ん

「手コキなんかより、もっとすごい方法があるんだけど」  
「もっとすごい？」  
「いっぱい精が出る？」

「ああ、出る出る」  
「ホント!?!」  
「やってみせて！」  
「今すぐ！」  
「じゃあ、ここに横になってよ」



ベッドの上に促すと、  
アンジェラは恐る恐る  
ベッドの上で仰向けになる。  
ぶるん！  
アンジェラのデカイ  
おっぱいが大きく揺れた。  
改めて見ると、  
おっぱいでけえな！

ドキドキ

ア  
ー  
ン  
じ  
ェ  
ラ  
の  
デ  
カ  
イ  
お  
っぱ  
い  
が  
大  
き  
く  
揺  
れ  
た  
。

「んで、足を開いて」  
「わかった。こう?」  
「いやいや、もっと」

がばあ!

両手でアンジェラの  
膝を持って思いつきり  
股を開いた。

ピュッ  
ッ

ムキ  
ムキッ

かきかき  
かきかき

ム

ちんちんイライラさせている  
男は短気なのだ。

「ぎゃあ! 何をすの!!」

「何って、そりゃあ、SEXだよ…」

「SEX……。って、なあに？」

こいつ……。ホント何も知らないんだな。

「男と女でやる、気持ちいいこと」

最近では男同士だったり

女同士だったり色々あるみたいだが、

俺は興味ねえ！

というか、アンジェラは

人間ですらないしな。



きょん

ぽん

ぽん

むちむち


「ふーん……そっか。」

気持ちよくなったら

精が出るんだもんね。

気持ちよくなる方法、教えて？」





「そうだな……。まずは、おっぱいを  
見せてくれないか」  
「男の人って、ホント  
おっぱいを見たがるわね。  
魔族の男どももそうだったわ!」  
アンジエラがなんだか憤慨している。  
やっぱこいつ処女かー。  
サキュバスのくせに  
何も知らねーんだもんな。

わ  
わ  
わ

はっ  
はっ  
はっ  
はっ  
はっ

「まあそう怒るなって。  
気持ちよくなるにはお互い  
裸になるのが一番だから」

「わかったわ。これでいいかしら」  
ぶるんっ！

俺の手に余るほどの巨乳が、  
仰向けになった重力に  
負けて外側に広がる。

ぶるんっ！！

しかし垂れることなく  
つややかな乳房、ツンと突き出た  
桜色の乳首が男心をくすぐる。





「じゃあ、触るぞ…」

さわっ……。

むにゅん！

「ふにゃ…」

「な、なんだこれ!？」

さわっ

むにゅん♡♡

さわっ

ふにゃ…

柔らかいってのもんじゃないぞ、これ。

触った指がほとんど抵抗なく

そのまま沈んでいく。

絹のように細かい肌が触り心地がよく、

いつまでも揉んでいた気分。



♡♡

たっはっ

たっはっ

もみ

もみ

「我のおっぱい、変なの?」

「あ、違う違う。超最高。」

「こんなおっぱい見たことない」

「ふっふん。そんなにいいんだ...」

アンジェラは戸惑った表情で、

俺の両手で自分のおっぱいが

揉まれる様子を見つめている。

「ん... ふっ...」

揉んでいるうちに、  
手のひらに収まった乳首が  
だんだん固く尖ってきた。  
指で摘んでみる。

「ふにゃっ!?!」  
「ほれ〜、くりくり〜」  
「あっ、それ、ずるい」

アンジェラは顔を紅潮させ、  
刺激から逃れようと身をよじる。  
おっぱいがそれにつられて  
ぶるん!と震えた。

いぶるん

じりっ  
じりっ

じりっ  
じりっ

♡♡♡♡

はむっ

ちゅっ

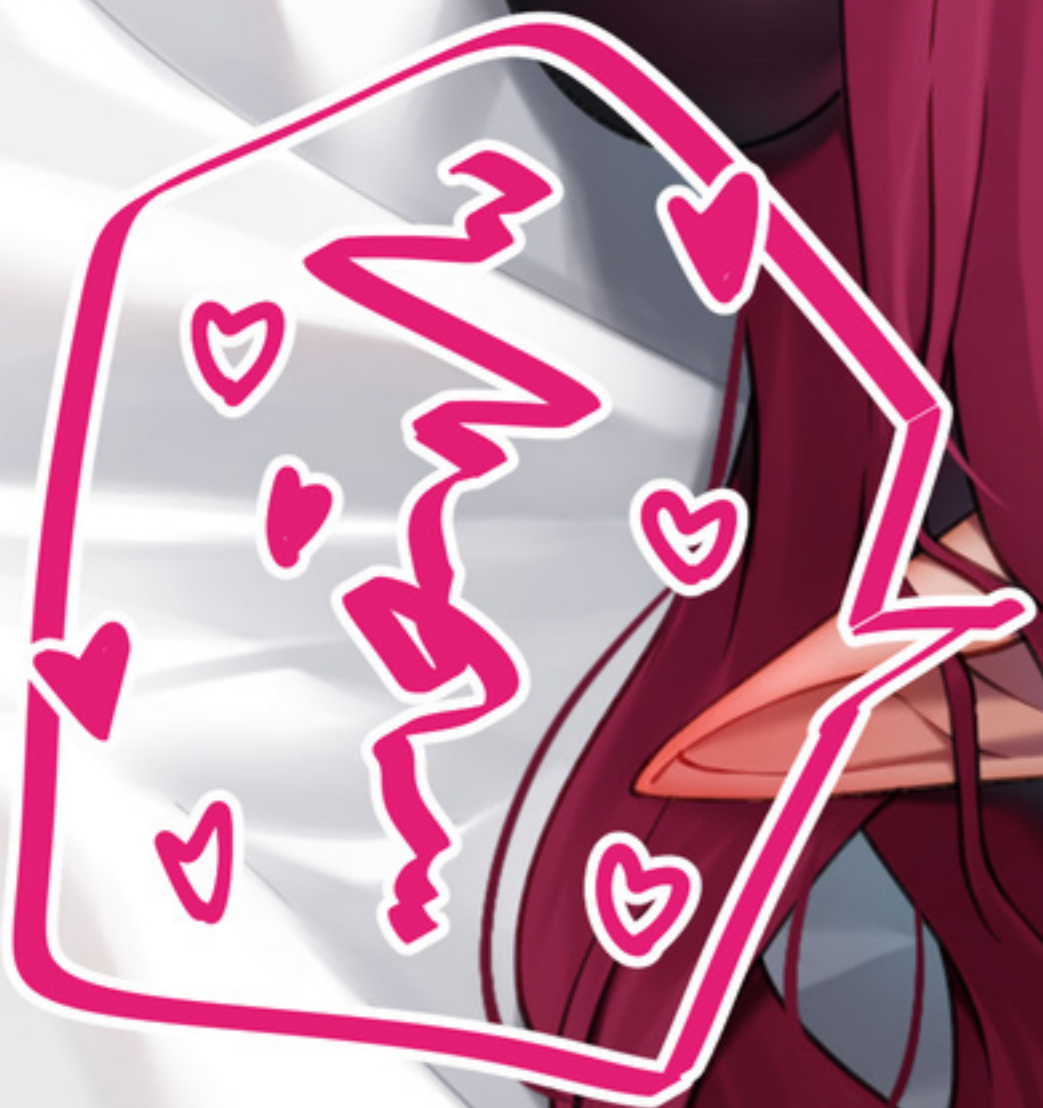
ちゅっ

つきたての餅のように  
柔らかいおっぱいは、  
周囲を柔らかかく  
握り込むと、乳首が  
ひとりでに飛び出てきた。  
思わずその先の乳首を  
口にくわえてしまう。

はむ。ちゅうちゅ。

くりっ  
くりっ

「ふあっ…♡  
そんなところ吸っても、  
おっぱい出ないよ?」  
「おっぱいを  
見たら吸いたく  
なるのが男だから」  
「ふーん、一生懸命に  
おっぱい吸ってるの、  
かわいいかも」



下半身の刺激も忘れない。  
ビキニパンツの上から  
縦筋を撫でたり、縦筋の  
付け根にあるまだ露出してない  
クリトリスを指の腹で  
細かく刺激したりだ。

「あん♡ それ、気持ちいい…」

ちゅぽ ちゅぽ

しゅりゅ

しゅりゅ

あん♡

あ♡

アンジュエラはデリケートな  
ところを触れられるたびに  
敏感に反応していたが、  
だんだん回数が少なくなり、  
興奮した息遣いを  
するだけになった。  
そろそろだな。

ぺちぺち。

俺はビキニパンツの上から  
ちんちんで叩いた。

「アンジエラ、始めようぜ。

パンツ脱いでくれよ」

「そのおちんちんで、

何するつもりなの？」

ぺちっ  
ぺちっ  
ぺちっ

ゆっ  
っ

ゆっ  
っ

んん  
んん

何って？ そりゃナニよ。

「これから気持ちいいことをするぞ。

今までは準備体操みたいなもの」

「体操？ 体操って何？」

「食べられるの？」

魔族に体操の概念はなかつたかー。



「えーと、まあ、準備。いきなり入れると痛かったりするし」

「そっか、御主人様は痛くならないように準備してくれたんだ。優しい人！」

か  
か  
い  
い  
ば  
ば  
っ  
っ



がばっ！と抱きつかれた。よしよししてやって、落ち着かせる。無邪気な笑顔を見せる。アンジェラの表情とワガママボディのギャップが凄かった。

きゅん  
きゅん

するする。アンジェラが  
ビキニパンツを脱いだ。  
つるん。

アンジェラのおまんこは、  
その肉感的な見た目と裏腹に毛が  
生えてなくてつるつるだった。

つるん♡

ビキニ

ぷるん

トロトロ♡

「まだ誰も男を許していない  
女のそこは、トロトロと蜜が  
こぼれ出していた。  
「じゃ、入れるぞ…」  
「いっぱい気持ちよくなってるね♡」

ん  
ちんちんをアンジエラの穴の  
ところに押し当てると、  
抵抗なくぬるりと入り込んだ。  
「ふわっ……。入ってくる……」  
「うおっ!? なんだこれ!!」

どどどどど

ぬるっ

……

ぬるっ  
13p, 13p...

やばい。  
熱くて、ぬるぬるしてて、  
俺から精を搾り取ろうと  
グニグニ締め付けてくる。  
出ちゃう。出ちゃうって!  
我慢我慢……



一方、アンジェラの方も初めての感覚に押し流されそうになっていた。

「しゅごいの…。御主人様のが、身体の中に直接伝わってきてるよ」

熱く潤った女の粘膜が、ぬめぬめと俺のちんちんを容赦なく

こすりつけ、締め付けてくる。

「あ、タンマ。そんなグニグニ

されると、出ちゃうから…。ね？」

「ダメ、許さない」

ぬるっ♡  
ぬるっ♡

ぐにゅっ♡  
ぐにゅっ♡  
ぐにゅっ♡

はあっ♡

ぎゅっ!!

俺は蜘蛛の巣に引っかかった虫みたいアンジェラの手足に絡め取られ、身動きが取れなくなる。

はっ♡  
はっ♡  
はっ♡  
はっ♡  
はっ♡

「ん」  
アンジェラが耳元で何かを  
つぶやくと、俺の身体は  
勝手に動き出してアンジェラの  
腰にピストンしだした。  
自分で止められない。

「身体が勝手に！」  
あ、出る、アンジェラ、出るってこれ」

「ご主人様、いっぱい出して♡」

「我の中に出して♡」

「うわあ〜！」

ギョウウッ

ビュ

ルルル

ルルッ！！

ビュルルル！

ムチムチのアンジェラの  
身体にもみくちやにされながら、  
俺は為す術もなく  
アンジェラの中に精を吐き出した。



「ふわっ！ 出てる！  
御主人様あ〜♡」  
「うお、出る、まだまだ  
出る。無限に出る……」

ビュルル！ ビュルル！  
アンジェラは自分の身体の中の  
優しい衝撃に驚いていたが、  
どこか嬉しそうだった。

ビュッ  
はーっ……♡  
はーっ……♡

ビュル  
ビュル  
ビュル  
ビュル  
ビュル  
ビュル  
ビュル  
ビュル  
ビュル  
ビュル  
ビュル  
ビュル

ビクビク  
ビク





「ふはあ、御主人様、  
すごかったの……♡」  
首に巻き付けていた腕から開放され、  
ようやく俺は動けるようになる。  
いつのまにか術も解けていた。

ドキ  
ドキ



「サキュバス……  
まじやばいって……」  
俺がかすれる声で  
感想を漏らしていると、  
「もしかして、SEXって  
すごくいいんじゃない？」  
アンジエラは別の方向性で  
興奮していた。

はあはあ……

とろろお……

はあ、



「御主人様、もう一回！  
もう一回しよ！」  
「アンジェラさん？  
始める前にエッチな目で男が  
見てくるの、バカなんじゃない？  
とか言ってたよね」  
「SEXしないなんて馬鹿じゃない？  
したほうがいいに決まってるじゃん」

ウウウウ...

ヒンヒン...

どろろ...

むわ...

xxx

あーあーと口をきいてる気持ちが違え！